

# 『葉武列土倭錦絵』をめぐって

吉 田 弥 生

## 1 日本へ移入された『ハムレット』

『ハムレット』の一節が日本に紹介された最初は、明治4年<sup>(1)</sup>(1871)に刊行された中村正直<sup>(2)</sup>訳『西国立志編』であった。

一般に『西国立志編』は福沢諭吉の『学問のすゝめ』と並ぶ明治時代の2大啓蒙書として知られている。訳者の中村正直はイギリス留学時に友人より贈られたスマイルズ (Samuel Smiles) の『自助論』(“Self Help”)を訳し、そこに書かれた自助の精神(「自ら助くるの精神は凡そ人たるものの才智の由て生ずるところの根源なり」)は日本の近代化のバックボーンとなった。そして、閉塞的な現代社会において「成功のための論」として注目され、スマイルズの原著と正直の訳書がともに文庫化されるなど、今ふたたび脚光をあびている。

スマイルズはこの世界的名著のなかで〈志を持って努力すれば成功する〉精神を説くために多くの偉人の言葉などを具体的な事例として示した。『ハムレット』はその一つとして挙げられたのである。とりあげられたのは、デンマーク内大臣ポローニアスがフランス留学へ旅立つレアティーズを見送る場面。教訓的なセリフとしての一部のみであった。つまり、正直『西国立志編』において、明治4年に初めて日本に紹介された『ハムレット』はそうした一部分だったということになる。

『ハムレット』の作品そのもの、あるいは主人公をめぐって、これまでシェイクスピア研究者を中心に様々論じられてきた。作品の複雑さや不可解さゆえの魅力に惹かれるように世界中で訳され、批評され、そして上演されてきた数は莫大であるが、現在では復讐劇の側面や〈悩める貴公子〉像といった共通認識が出来上がりつつある。それらに対して、日本への移入の最初はどうであろう。教訓的なセリフの一部移入というこの歴史的事実は、そののちの日本における『ハムレット』の理解を「処世訓的解釈」として、近代初頭の一定期間を固定化させたのではないだろうか。シェイクスピア作品をはじめて受容した日本人が〈忠〉や〈孝〉、〈礼〉といった前近代的精神にあてはめようとした試みの様相が、特に翻案作品に表れているように思われる。

そこで本稿では、『ハムレット』の翻案作品をめぐり、原作との比較を通して、独特な日本的解釈や同時代の演劇界について考察する。

## 2 仮名垣魯文の二作品

日本に『ハムレット』を「物語」として紹介したのは幕末から明治にかけて活躍した戯作者でジャーナリストの仮名垣魯文であった。

「物語」として日本に姿をあらわしたそれは、「平仮名絵入新聞」の明治8年(1875)9月7日、9月9日、9月10日の3回にわたって連載された『葉武列土』<sup>(3)</sup>である。

仮名垣は明治3年に『西洋道中膝栗毛』(初編)を刊行し、すでに日本旧来の文学に西洋文明の移入を試みていた。そのように、新たに日本へ移入される〈西洋〉に俊敏な仮名垣ではあったが、彼はシェイクスピア翻案の最初の人ではなかった。『葉武列土』の以前には、明治6年には坪内逍遙によって『ジュリアス・シーザー』が『自由太刀余波鋭鋒』として、明治7年には宇田川文海が『ヴェニス商人』を『何桜彼桜銭世中』として翻案されていた。仮名垣「ハムレット」はこの流れに乗るように誕生したといえるだろう。

「平仮名絵入新聞」に発表された仮名垣「ハムレット」の表題にまずは注目したい。それはまさしく歌舞伎の「語り」の方法に従ったものであった。以下に翻刻を示す。

しぐみ えいこく きやうげんさくしや めいさく しやうほん  
原出は英国の／狂言作者／セーキスビールが／名作の正本  
せうろく あり しんぶん きしや そらおぼへ きゝかき  
抄録は絵入の／新聞記者／チヨビスケリウの／暗記の聞書  
な だい も そのまゝ  
名題則其儘  
は わ れ つ と  
葉武列土  
せいようしたて  
西洋製の／ブック 五冊

シェイクスピアを「英国の狂言作者」と紹介している。「西洋製」は「正本製(しょうほんじたて)」に倣ったものか。「五冊」は原作の五幕からくるであろう。「ブック」などと英語を用いているものの、この表題の構成は繰り返しになるが、歌舞伎の「語り」そのものである。明治4年といえ、開化以後とはいえども、庶民の間ではまったく幕末の文化が引き続いており、芝居小屋に出かけては相変わらず黙阿弥の世話狂言を楽しみ、戯作に親しんでいた頃である。戯作の担い手でもあった仮名垣は当時の庶民になじみのある表記方法をもって、シェイクスピア作品の世界へいざなつたのであろう。

続いて、3日間にわたり連載された全体の構造を明らかにする。

- ・明治8年9月7日掲載分

だいじよ てんまる くわうでうもんぐわい  
第序(丁抹国王城門外の場)

御殿の場

- ・明治8年9月9日掲載分

宮内卿館の場

- ・明治8年9月10日掲載分

城外堀端の場

同続森の場

※9月9日と10日の2回については、「西洋劇 葉武列土 本読序幕の続」の表題あり。

これらに書かれた内容は、ほぼ原作の第一幕第一場にあたる。そして、「本舞台三間の間正面遠見に王城大手城門の書割」「丁抹王城堀端夜更の体をかすめたる大調煉風の音にて幕明く」などと、歌舞伎の上演台帳さながらに舞台の様子を書いたかと思えば、「こんな事を書いて居ては一幕が十日もかゝるからあとはばかりぎつとお嘸しませう」と断り書きをしている。

この仮名垣「ハムレット」を、まだ原資料を目にできなかった柳田泉は『西洋文学の移入』（1974年刊 春秋社）のなかで「梗概」と記している。しかし、その実態は「この見得よろしくぶん廻す」などと道具替りを示し、セリフも入り、脚本と違って違いない。

国名は「丁抹」、登場人物に至っては、葉武列土（ハムレット）、おへりや姫（オフィーリア）、頃珠壽（クローディアス）、せるとると前（ガートルード）、洞長（ホレーシオ）、母衣人壽（ポローニアス）、のように音へ漢字を当てはめたのみである。国の設定や登場人物名は原作に忠実なものになっている。

やはり、筋書や梗概というよりも、『葉武列土』とは、仮名垣が翻案劇を目指した作品だったといえるであろう。しかし、この時には先に書いたとおり、第一幕の翻案にとどまっていた。完成された翻案劇が世に送られたのは、明治19年（1886）。同じ仮名垣魯文によってであった。

仮名垣が再び筆を執った「ハムレット」翻案は、仮名垣自身が明治11年（1878）に創刊した『東京絵入新聞』紙上に連載された。連載期間は明治19年10月6日から11月16日までであった。10月6日の号は翌7日より掲載した本文の前置きとして、「改良演劇の筋書」なる文章が掲載されている。その中には、「明治九年中本社絵入新聞紙上に於て纔に三四回掲げしが当時の看客未だ西洋小説の微意有を味ふ者なく闇雲に面白からずとして頗る不評なりしかば断然続稿を廃し次号の記載を見合し」と仮名垣の第一作目の『葉武列土』が途中で「打ち切り」になった真相が明かされている。

なお、10月6日号では『葉武列土倭錦絵』であり、同じ「改良演劇の筋書」によれば、「欧州演劇の役人を我日本の俳優似顔絵に比擬模し」たとある。この文章には二つの大きな矛盾する方向性が含まれている。演劇改良の機運に乗って作品を発表する意図と、歌舞伎に西洋演劇をあてはめようとする旧態依然の態度である。そこには、西洋演劇に倣って演劇改良を推進する知識階級と、保守的な大衆の嗜好の双方に気遣う仮名垣魯文の立場がうかがえる。

ところで、仮名垣は何を目的に2作の「ハムレット」を書いたのであろうか。やはり上演を目的としたはずではないだろうか。しかし、執筆の当時それは実現しなかった。

### 3 『葉武列土倭錦絵』の構成

上演の問題は先の課題に送るとして、ともかく日本人によるはじめて完結した翻案作品として誕生したのが仮名垣の改作「ハムレット」である。10月7日号には表題も改まり、「役人替名」も掲載された。

表題を以下に翻刻する。

げきしやう かいりやうあん いざりす じ だいきやうげん  
劇場の改良案は／英国の時代狂言

しじやう かいりやうめん わがくに じだいきやうげん  
紙上の改良面は／我国の時代狂言  
はむれつとやまとにしきえ  
葉武列土倭錦絵  
ぶつく  
西洋綴 五冊

角書に「イギリスの時代狂言を日本の時代狂言に仕立て変えた作」という意図が示される。また、そのほかこの回の本文には、「文章は操曲淨るりの院本調」という体裁に関することが書かれていたり、「本職の狂言作者が見る時は素人仕事」などと戯作者の自分が狂言作者さながらに「院本調」の脚本を連載することについて、へりくだった〈挨拶〉を述べている。

ところで、連載された新聞は「絵入新聞」であり、毎号、内容に応じた挿絵がある。この挿絵のほとんどは役者似顔で描かれているとみられる。判別できるものを役と対応させれば、葉叢丸（ハムレット）は九代目市川団十郎、実刈屋姫（オフィーリア）は四代目中村福助、斯波兼寿（クローディアス）は初代市川左団次、宮内主膳（ポローニアス）は四代目中村芝翫、先君兼頼の亡霊（ハムレット父・先王の亡霊）は五代目尾上菊五郎である。しかし、これら役者の顔ぶれで上演の予定があったか、に関しては定かでない。10月7日号にある「役人替名」には「西洋演劇日本俳優見立役名」とあり、あくまでも「見立」にすぎないとみてよいだろう。<sup>(4)</sup>

なお、この架空の配役には、当時の歌舞伎界の状況が深く関わるものと考えられるので、別項に後述することとし、ここでは『葉武列土倭錦絵』の全体的な構成を明らかにしたいと思う。掲載日（すべて明治19年。以下、年を省く）、および後に簡潔な梗概を付すための任意の番号を付す。

【全体構成・掲載日・場割】

- (1)―①大序（10月9日） 最上の御所・堀端
  - ②序の二（10月12日） 最上城内
  - ③序の三（10月14日） 最上城内
  - ④序の四（10月16日） 宮内主膳邸内
  - ⑤序の五（10月19日） 堀端
  - ⑥序の六（10月21日） 堀端
- (2)―①第二場（10月23日） 宮内主膳邸内
  - ②第二続（10月26日） 宮内主膳邸内
  - ③第二続（10月28日） 斯波弾正邸内
  - ④第二続（10月30日） 斯波弾正邸内 「景事 葉叢丸そら物狂ひ」
- (3)―①第三場（11月2日） 弾正邸仏間（※「第二場」と誤記、次回で説明）
  - ②第三続（11月5日） 弾正邸別館
  - ③第三続（11月6日） 弾正邸奥殿
  - ④第三続（11月7日） 弾正邸内妃寝所
- (4)―①第四場（11月9日） 弾正邸内
  - ②第四場（11月10日） 弾正邸内

- ③第四続 (11月11日) 弾正邸内
- ④第四続 (11月12日) 弾正邸内
- (5)―①第五場 (11月13日) 墓所
- ②第五続 (11月14日) 城内
- (6) 大切 (11月16日) 城内広間

### 【梗概】

- (1)―①最上の太守・兼頼が急逝し、弟の弾正が即位。岩室主税虎長らが城の堀端で白馬に乗った先君の亡霊を見る。
- ②宮内礼之丞は京都留学を願い出て、許される。弾正は葉叢丸に「やがて斯波家を泰山の安きに置かばその時こそ家督はおんみに譲」と偽る。
- ③芹戸の前は葉叢丸に再婚の言い訳を述べるが、葉叢丸は不審を感じる。葉叢丸は虎長に父の亡霊出現の件を聞く。
- ④宮内主膳邸の侍女たちは葉叢丸を喜々として迎える。礼之丞は妹の実刈屋姫に「若君の恋は一時のもの」とさす。
- ⑤葉叢丸が亡霊に会い、後を追う。
- ⑥葉叢丸は亡霊から毒殺だったことを聞き、この件を虎長に明かし、復讐を誓う。
- (2)―①礼之丞が京都への留学に出立する祝いの席で、礼之丞は父宗晴から出羽一国を横領する野心があることを聞く。
- ②実刈屋姫は先君より許された葉叢丸との仲を父宗晴に断たれ、さらに、父が葉叢丸の命を狙っていることを知り、悲しみに沈む。
- ③弾正と妃は葉叢丸が発狂したと聞き、真偽を宗晴にさぐらそうとする。宗晴は葉叢丸が実刈屋にあてた恋文を見せ、娘への失恋が原因による「真の発狂」という。葉叢丸が「舞跳の所作」を見せるといって乱入する。
- ④葉叢丸は都下りの俳優たちを「翌の晩見物するゆゑ余別やかたへ召連まいれその節は伯父君も母上も御案内」と言って、その場を去る。
- (3)―①弾正と宗晴は葉叢丸が実刈屋姫に言い寄るのを見て、本当の狂気であることを確認し安堵する。
- ②「京都下りの俳優」たちによる劇中劇。葉叢丸は伯父と母の様子から亡霊の物語が真実であることを確認して、仇討ちを決心。
- ③弾正は葉叢丸の本心を恐れる。仏間での懺悔の言葉を葉叢丸が聞く。
- ④葉叢丸は母芹戸の前に諫言する。それを聞いていた宗晴が葉叢丸に殺される。
- (4)―①弾正は母への諫言と重臣殺害の理由で葉叢丸を手討にするというのを、母芹戸の前が礼之丞に父の仇として葉叢丸を討たせることを提案。弾正は礼之丞が留学からの帰国を待つ間、葉叢丸を檻に幽閉させる。

- ②礼之丞が京都から帰国する。
- ③実刈屋姫が発狂する。
- ④礼之丞は葉叢丸に公然勝負を申し出る。葉叢丸はこれを受ける。狂気の実刈屋姫が入水、溺死する。
- (5) — ①鋏蔵と鋤六の墓掘り。葉叢丸は実刈屋姫の後を追う心情。
- ②弾正は毒酒を用意するが、芹戸の前がこれを仰ぎ飲む。
- (6) 毒酒を飲んだ芹戸の前は懺悔の告白をして死ぬ。弾正はこれに怒り、葉叢丸を討とうとして逆に殺される。葉叢丸が切腹するのを礼之丞が介錯し、礼之丞も後を追って切腹する。

#### 4 シェイクスピア作品との相違点

それでは、一体どこが原作と翻案とが共通し、あるいは異質なのであろうか。比較の視点はそこにつきるのであるが、相違点からさらに『葉武列土倭錦絵』を考察したい。

まずは大きな設定の違いに着目するべきであろう。デンマークという場（舞台）を「北朝無二」である「最上の郡山形」（南北朝時代の日本国内の強大な一国）にうつしている。つまり、魯文の「ハムレット」は歌舞伎の時代物狂言として書かれたことになる。

名前もそれぞれ日本の名に変えているのだが、魯文の一作目ではハムレットを葉武列土（はむれつと）としたように、音をそのままに漢字にあてはめたものであったが、この二作目の完結作ではすっかり日本名に変化している。主な役名を原作の役名と対照させれば、次のようになる。<sup>(4)</sup>

- 葉叢丸（ハムレット）
- 斯波修理太夫源兼頼（先帝の亡霊）
- 斯波弾正忠兼寿（クローディアス）
- 宮内主膳宗晴（ポローニアス）
- 芹戸の前（ガートルード）
- 宮内礼之丞晴貞（レアティーズ）
- 実刈屋姫（オフィーリア）
- 岩室主税虎長（ホレーシオ）
- 白鳥十郎則家（フォーティンブラス）
- 丸背利助（マーセラス）
- 渡辺鳴門（バナードー）

原作の人物名の音と無関係ではないが、歌舞伎時代物狂言としてのかかなりの独自性が役名の作り方には見えてくる。

では、人物造形そのものはどうであろうか。明らかな違いのみられるのは、原作のポローニアスにあたる、宮内主膳宗晴である。『葉武列土倭錦絵』では斯波弾正忠兼寿の忠臣とみせか

けて、実のところ時機がくれば謀反を起こそうとはかる悪人に描かれている。原作ではクロウディアス側につかえる内大臣であるためにハムレットの敵方となっているが、この作では宗晴そのものが腹黒い人物として作られている。ところが、礼之丞・実刈屋姫という宗晴の二人の子に悪人の素質は皆無であり、まるでそれゆえの苦悩が兄妹の運命を破滅に導くかのようである。

また、この作における（原作のガートルードにあたる）芹戸の前の造形もかなりの違いがある。芹戸は先の夫を弾正と共謀で殺害している。そして、そのことを諫言した葉叢丸を礼之丞に討たせるよう弾正に受け容れさせる。実の子を見殺しに、新しい夫を操ることができる女性である。しかし最後には自ら毒酒をあおり、懺悔を告白する。浅はかで本能的なガートルードとは程遠い、歌舞伎の御家物に登場する、例えば「先代萩」の八汐や「鏡山」の岩藤等に近い要素を持った女性として描かれている。

登場人物の描き方からすれば、この作品は御家横領をたくらむ重臣という実悪の役柄や、老女形の敵役らの活躍する、類型的な御家物のパターンといえる。

挿絵に描かれた衣裳もまったく歌舞伎の御家物の様子である。前髪つきの葉叢丸、赤姫の実刈屋姫、白装束の上下をつけた先君の亡霊、病鉢巻をした狂人などなど、歌舞伎特有の衣裳の約束事にしたがって描かれている。

さて、筋・趣向はどうであろうか。

先君の亡霊が出現し、葉叢丸（ハムレット）は父が新しい国主である伯父によって毒殺されたことを知り、復讐を考えるという大筋は原作同様である。狂人と偽って復讐の日まで過ごすこと、劇中劇、母への諫言と重臣殺害、実刈屋姫の発狂と水死、そして墓掘り、毒酒、主要人物たちの死、という展開もほぼ同じになっている。だが、趣向という点で見れば、そこには歌舞伎と西洋演劇の異質性をみいだすことができる。

まずは劇中劇である。原作では第3幕第2場で、国王と王妃に扮した役者たちが登場する。魯文の翻案歌舞伎では、同様の該当部分は11月5日号にある（第三続）が、このほかに葉叢丸自身が舞踊で表現する場面が設けられている。この場面は10月30日号で挿絵にあり、病鉢巻のもの狂いの踊りを披露する葉叢丸が描かれており、「葉叢丸そら物狂い」の「景事」として詞章が10月30日号に掲載されている。挿絵を見たところ、清元の舞踊「保名」の場面に似ている。歌舞伎の「物狂い」系統の舞踊におさまりそうな一場面として作劇されており、歌舞伎の手法を存分に使うねらいで書き替えたかと思われる。こうした箇所は随所に含まれており、それらを見るにつけ、魯文が原作を忘れるほどの純歌舞伎の上演を意図したことが推される。似顔は九代目市川団十郎であり、この作品の異質性を考える際には、新聞連載された当時の劇界の様子を無視することはできない。

## 5 明治19年の歌舞伎界

新聞連載された明治19年の歌舞伎界はどのようなものであったか。『続々歌舞伎年代記』（以

下、「年代記」とする)の記事を追ってみると、中心となって活躍する役者の勢力関係や、この作品と影響関係が考えられそうな、西洋文化と関わる作品の上演があったことなどがわかる。

1月の新富座では二番目に黙阿弥による『西洋噺日本写絵』が上演された。この時の「年代記」には次のような記述がある。

二番目は黙阿弥の脚色みたる三遊亭円朝の『英国孝子傳』と云ふ人情噺し毎度講座にて喝采を得たもの。大切のかつぽれ宗旨を変へて團十郎大働きに演じ是迄彼の活歴に倦み疲れたる見物非常の悦びにて好況となりたり

『英国孝子傳』の原作はヴィクトリア時代の作家チャールズ・リードの“Hard Cash”であり、福地桜痴の勧めによって円朝が人情噺とした作といわれている。<sup>(5)</sup> 作品は人気をとっていたこの人情噺を黙阿弥が歌舞伎化したものである。

九代目団十郎が明治の演劇改良運動に熱心となり、歌舞伎のいわば高級化を目指したことによる演技演出が一般大衆に歓迎されなかったことについてはすでに指摘してきたが、この大切の「かつぽれ」を団十郎が踊る姿に見物はよろこんだということである。大衆の望む団十郎の芸は彼の努力した活歴劇ではなかったことの証といえる。さらに「年代記」は評する。

團十郎の所謂活歴なるもの或る一部には歓迎せらるゝも一般の見物には又かと云はれ中には團十郎は地芸がまづいから斯んな新式な事をやつてごまかすのだなど彼れの技芸に対して非難攻撃の声は漸次に高まり来り

明治19年の九代目団十郎は自らの信念で試みてきた改良演劇が非難をあびる、という立場におかれていたのである。

仮名垣魯文は『西洋噺日本写絵』で主人公をつとめた団十郎、そして近代への果敢な挑戦欲と高尚趣味を持ち、活歴熱を非難されるに至った団十郎に「ハムレット」の翻案作、葉叢丸という役がはまると考え、架空の配役をしたのではないだろうか。

明治期の団十郎を考えるには、五代目尾上菊五郎の活躍もみるべきである。同じ明治19年、五代目菊五郎は3月、千歳座で『盲長屋梅加賀鳶』に出演している。この作について『尾上菊五郎自傳』には次のような記述がある。

私は村井長庵がやつてみたいと思つて居ますと新富座で堀越(團十郎)に先を越されたので何か是に似寄つた物は無いかと黙阿弥に噺した事があるのを黙阿弥が覚えて居て此加賀鳶の中へ書き入れたのが按摩道玄なので御座います

菊五郎の団十郎へ対するライバル心がここには明らかにされている。それだけこの時期の団十郎の新奇なるものへの取り組みが演劇改良に関わらずとも先駆けの才気に満ちていたともいえる。仮名垣の考案した配役は明治19年の劇界で実を的を得ていたと考えられる。

ところが、連載の後に、この配役で上演という日の目を見ることはなかった。かならずしも、はじめから上演を目標とした連載ではなかったにせよ、この作一篇の時代物戯曲としての完成度は高く、先述のように挿絵をうかがうところ、配役も当時の劇界の人気役者を取り入れるなど、いってみれば「大衆ウケ」をねらったものだった。しかし、上演にはいたらなかったので



ある。この事情については仮名垣魯文と団十郎と改良会の関係がからんでくる。それらの解析については、別の機会の課題としたい。

### おわりに

ちなみに上演が実現したのは1991年の東京グローブ座。これが初演である。市川染五郎が葉叢丸と実刈屋姫の二役をつとめた。立役と女形を演じ分けられる歌舞伎の俳優ならではの演技・演出である。そして、この作がいかにか歌舞伎の手法で巧みに翻案されていたかが実によく立証されていたことを記しておく。

### (注)

- (1) 「駿河国郡静岡藩 木平謙一郎蔵」版本の奥付には「明治三年十一月」とある。
- (2) 河竹登志夫『日本のハムレット』（南窓社 1972年）
- (3) 川戸道昭・榎原貴教編『明治翻訳文学全集 新聞雑誌編1』（1996年6月 大空社）
- (4) ちなみに、この「見立役名」に記された役名と2日後に掲載が開始した本文の役名は大いに異なっている。たとえば、本文で「葉叢丸」となるハムレットは、「見立役名」の時点では、魯文一作目の「ハムレット」と同様、「葉武列土親王」であり、本文で「実刈屋姫」となるオフィーリアは10月7日号では「阿部利亜姫」である。連載開始以降に役名を一新した理由はなんだろうか。これについては本文中に見出すことができない。
- (5) 延広真治「『英国孝子之伝』と“Hard Cash”」（『文学』1979年2月 岩波書店）